

<参考文献>

- 赤堀雅幸(編) 2008 『民衆のイスラーム——スーフィー・聖者・精霊の世界』(異文化理解講座 7) 山川出版社。
 ティエリー・ザルコンヌ(東長靖監修・遠藤ゆかり訳) 2011 『スーフィー——イスラームの神秘主義者たち』
 (『知の再発見』双書 152) 創元社。
 東長靖 1993 「スーフィーと教団」山内昌之・大塚和夫(編)『イスラームを学ぶ人のために』世界思想社, pp.
 69-85。
 —— 2010a 「スーフィズムの成立と発展」佐藤次高(編)『イスラームの歴史 1』(宗教の世界史 11) 山川出
 版社, pp. 155-195。
 —— 2010b 「スーフィー教団の革新と再生」小杉泰(編)『イスラームの歴史 2』(宗教の世界史 12) 山川出
 版社, pp. 68-97。

(丸山 大介 防衛大学校人文社会科学群人間文化学科・准教授)

佐原徹哉『中東民族問題の起源——オスマン帝国とアルメニア人』白水社 2014年 275+22頁

1909年4月、アナトリア中南部のアダナ州の各地で騒乱が発生し、数多くのアルメニア人がムスリム住民によって殺害された。この「アダナ事件」は、1890年代および第一次世界大戦中の事件とあわせて、オスマン帝国末期に生じたアルメニア人に対する一連の暴力のなかに位置づけられる。今日、「アルメニア問題」として知られるこうした事象は、その政治性ゆえに、トルコ、アルメニアにとどまらず、欧米諸国においても多くの関心を集めてきた。しかし、やはりその政治性ゆえに、客観的とはいいがたい「研究成果」が大量に発表されており、研究状況はむしろ混迷を増しているようにも思われる。こうした困難な研究課題に、比較的研究蓄積の乏しいアダナ事件の分析から取り組んだのが本書、『中東民族問題の起源——オスマン帝国とアルメニア人』である。本書は、著者佐原徹哉氏が2010年から2013年にかけて学術雑誌などに発表してきた6点の英文論文と、それをまとめた著書、*What Happened in Adana in April 1909?: Conflicting Armenian and Turkish Views* (Istanbul: Isis Press, 2013) に加筆し、修正を加えたものである。

日本の読者に向けて問題の所在を明らかにすべく追加された序章では、アルメニア人の処遇をめぐるオスマン末期に生じた三つの事件の概要が解説されている。そしてこれまでの研究は、それら事件の連続性を唱え、その原因をオスマン政府とアルメニア人のどちらかに帰する目的論的な性格を有しているとの理解が示される。さらに、これまでの議論には矛盾が多いことも指摘され、そうしたなかでアダナ事件に注目することが硬直化した議論に一石を投じることにつながるとの見通しが提示される。

第一章は、アダナ事件をめぐる研究状況を扱っている。この章ではアダナ事件を、青年トルコ革命を主導した統一派がアルメニア人排除を目的として仕組んだとする「統一派陰謀説」と、アルメニア人がヨーロッパ列強の注意を引くために引き起こしたとする「アルメニア人陰謀説」が展開されてきたことが論じられる。その後、それらの根拠とされる史料が有する問題点が入念に検討される。そして、「陰謀論が幅を利かせ」、「初歩的な史料批判すらなされない」研究状況と、こうした「陰謀論を離れて、ごく基本的な事実の確認から」アダナ事件を再検討していくという本書の姿勢が示される。

つづく第二章では、本書の舞台であるアダナ州特有の社会経済的背景として、19世紀に生じた変化が以下のように論じられる。19世紀前半までのアダナ州は、オスマン帝国内で最も開発の遅れた地方であり、いくつかの地方有力家系が影響力を誇示していた。こうした様相は、1860年代に中央政府がアダナ州に「改革師団」を派遣し、統制を強化したことで一変する。中央政府主導で開発が進められた結果、綿花を中心とした輸出向け商品作物産業が隆盛し、それは土地の集積に成功したムスリム地主を富ませるとともに、商業分野におけるアルメニア人の成長につながった。その一方で、定住化させられた遊牧民やアラブ地域からの労働移民、そしてロシア領から大量に流入し、土地を与えられた難民からなるムスリムの小農民は、やがて小作人へと没落していく。こうしたなか、下層に置かれた「定住遊牧民とムスリム移民」にとって、不満のはけ口として、経済発展の恩恵を受けたアルメニア人が浮上したとされる。

第三章は、1908年の青年トルコ革命がアダナ州にもたらした政治的、社会的変化を論じることにあてられている。もともと統一派の基盤が脆弱だったアダナ州において革命は、「俄か統一派」が跋扈し、旧体制を支えた州知事を追放するという結果をもたらした。その後、後任知事のもとで地方政府が機能不全に陥るなか、知事を取り込んだ「守旧派」と、知事に批判的な「立憲派」という対立軸が生じる一方で、ムスリムとアルメニア人の緊張関係は高まっていく。その背景には、「自由」を喧伝した革命後に統制がゆるむなか、自己防衛の必要性を感じたアルメニア人の武装が進み、アルメニア人が宗教的・民族的象徴を公にすることを自重しなくなったことから生じたムスリムの不信感があったという。

「隠された対立軸——難民、そして土地問題」と題された第四章では、前章で論じられたアルメニア人の武装化、そしてムスリムとアルメニア人の緊張関係が高まった背景が明かされる。1870年代以降、富裕なアルメニア人が土地の集積と新技術の導入をもとに効率的な農業経営をアダナ州の平野部で進め、まず近隣の山間部から、後には飢饉に苦しむ内陸部からアルメニア人移民を受け入れると、それは州内のアルメニア人人口の増加につながり、地方政府の警戒心を高めることになる。これを受けて、アダナ州では積極的にロシア帝国やバルカンから流入したムスリム難民を受け入れる方針が採用された。しかし、受け入れ後の難民に十分な配慮がなされなかった結果、豊かなアルメニア人村と困窮するムスリム村という形で宗教の違いが経済格差に結びついていく。これは、ムスリム難民がアルメニア人の土地を占拠し、地方政府がこれを容認するという状況に帰結し、アルメニア人側の不満を煽ることになる。そして革命後、土地の返還を求めるアルメニア人とこれに危機感を覚えるムスリム側のあいだの溝が深まっていったことが示されている。

こうした両者の緊張状態を受け、いよいよ第五章では、1909年4月に発生した事件のうち、アダナ市内での二度の衝突が論じられる。著者は、14日に始まる第一次事件の発端が、私的な諍いから生じたアルメニア人によるムスリム殺害であり、鬱積した緊張と相互不信、復活祭を直後に控えたそのタイミングがデマと混乱を引き起こし、騒乱に発展したという理解を提示する。そしてこの騒乱を「複数の、相互に無関係な偶発的要因が重なった結果」と断ずるとともに、州政府の杜撰な対応を指摘する。また、25日に始まる二度目の騒乱については、史料の批判的な読みから様々な可能性を検証し、些細な出来事を反乱と勘違いして軍の出動を命じた州知事の誤断を指摘する。このように二度の事件の偶発性、無計画性を指摘することで著者は、アルメニア人、トルコ人双方の研究者が展開してきた陰謀論を退ける。

アダナ市内で生じた騒乱と同時期には、周辺地域でも同様の事件が発生していた。従来の研究において、こうした同時性が事件の計画性の証左とされてきたのに対し、著者は第六章においてこれを、アダナ市内での事件に動揺し、予備役招集を行った州知事の不適切な対応が招いた混乱の連鎖だったと論じる。そのために、とりわけ被害が大きかったアダナ、ジェベリ・ベレケト両県をとりあげ、特に後者に関して、アルメニア人に対する偏見から不適切な対応を繰り返す県知事存在と、噂が混乱を呼び、それがさらなる噂につながるという混乱の連鎖を跡づける。最後に、大きな問題が生じなかったコザン県の事例を比較対象として取り上げ、行政当局の対応の違いを指摘するとともに、経済発展を経験した平野部のアダナ、ジェベリ・ベレケト両県と、その影響の乏しかった山間部のコザン県のあいだに見られた社会経済的条件の相違が、宗教集団間の関係に与えた影響の差につながったことを論じている。

最後に、終章では犠牲者数の把握と事件後の救済措置について述べられた上で、本書の議論がまとめられ、オスマン末期のアルメニア人の処遇をめぐる研究に対する今後の展望が述べられている。

本書の第一の特徴は、アダナ事件が生ずるにいたる背景説明に重きを置き、どのような社会経済的要因が存在し、それがどのようにしてムスリムとアルメニア人の緊張に結びついていったのかを丁寧に論じた点にある。こうした特徴は、小規模な諍いが大事件に発展するという本書後半の議論に説得力を持たせており、それにより本書は従来の「陰謀説」と一線を画すことに成功している。さらに、本書のこうした側面は、民族や宗教の違いのみに本質的に内在するかのように論じられやすい「中東民族問題」を、「起源」という言葉は適当ではないと思われるが）より的確に理解するための指針を示したという点でも重要である。

本書の第二の特徴は、実際の事件を論ずるにあたって、「事実の厳密な検証を旨とする歴史家の倫理」に従い、史料批判を積み重ねることで、複雑な事象の実態に可能な限り迫った点である。本書で示されているように、アダナ事件の経緯は必ずしも単純ではなく、史料から得られる情報も錯綜している。そうしたなか、多様な情報を批判的に読み込み、的確に整理していった著者の力量には目を見張るものがある。

それだけに残念なのは、日本語版に新たに付された序章や追記箇所には不正確な記述が多い点である。いくつか具体例をあげるとすれば、アルメニア人のアミラ（「アーミラ」は不自然）と呼ばれるエリート層は、徴税請負制と結びつくことで成長したイスタンブールの金融業者を中心としており、ギリシア人のコジャバシやブルガリア人のチョルバジヤと並列されるようなローカル・エリートではない。1913年に発表された著作のタイトルに「ホロコस्त」という言葉が使われていたかのような記述や、「東部六州」を「東部三州」としてしまうミスも見られる。第四章の冒頭で行われるように、オスマン帝国の中核地域であり、積極的に改革が推進されたバルカン南部のブルガリア人と、帝国にとっての重要度が比較的低く、それゆえにタンズィマート期には改革の立ち遅れた「アナトリア東部」のアルメニア人を同列に扱うことには無理があり、アルメニア人に関して言えばイスタンブール在住者と「アナトリア東部」在住者では区別されるべきだっただろう。そもそも、両者のあいだに見られた改革の進捗は地域によるものであり、それを民族単位で記述することは誤解を招くだろうし、こうした地域差は、1878年にブルガリアの自治が実現する以前からアルメニア人の不満につながっていたはずである。特定の「地域」に焦点をあてた本書が明らかにしたのは、「地域」特有の事情をふまえることの重要性なのではないのだろうか。

一読して明らかのように、不正確な記述の見られる箇所では、英語版をもとにした箇所比して注の数が圧倒的に少なく、また本書は日本語での研究成果を参考文献にも注にもあげていない。しかし、トルコでの在外研究に行った研究であり、英語版をもとにしているとはいえ、研究成果の価値を決めるのは何語で書かれたかではないはずだし、日本語で発表する以上、邦文の研究に言及しないのは読者に対して不親切であるように思われる。日本語版用に加筆された序文などの背景説明において、例えば、新井政美氏の研究を参照していれば、ギェルハネ勅令を「ムスリムと非ムスリムの平等を謳った」ものだとする誤謬は避けられただろうし、秋葉淳氏の研究を参照していれば、地方評議会に関してより正確な記述をすることができただろう。また、日本での慣例にそぐわない固有名詞表記が多用されているが、いずれにせよ一貫した方針がとられるべきであり、同一人物を同頁内で、「アフメト・ルザー」、「アフマド・ルザー」、「アフメド・ルザー」というように三通りに書き分けてしまうのは無用の混乱を招くだろう。

とはいえ、不正確な記述が日本語版の加筆箇所に集中しているがゆえに、それが議論の本筋に及ぼす影響は少ないのも事実であり、英語版と比べて慎重な読みが求められる部分もあるが、本書の成果自体はそれを補って余りある意義を有している。もとより、日本では「アルメニア問題」の認知度が低く、「陰謀説」がまかり通っていることもあるだけに、本書がこの問題への関心を高め、より正確な理解に読者を導いてくれることを期待したい。

（上野 雅由樹 大阪市立大学文学研究科講師）

大河原知樹・堀井聡江『イスラーム法の「変容」——近代との邂逅』（イスラームを知る 17）山川出版社
2014年 113頁

NIHU（人間文化研究機構）プログラム・イスラーム地域研究が監修する「イスラームを知る」シリーズにまた1冊、良書が加わった。本書は、「私たちが今日、目にしているシャリーアは、近代との邂逅によって大きく「変容」してしまった」のではないかと（本書2頁）という問題意識を出発点として、シャリーアすなわちイスラーム法の成り立ちと歴史、また近代における「変容」過程、そして現代における位置づけを論じたものである。

序論にあたる「現代におけるシャリーア」（大河原・堀井）は、冒頭に引いた問題意識のもと、第一に「ムスリムが多数を占める国家や社会にシャリーアが導入された事象をもってして「イスラーム復興」とか「イスラーム化」と認識することの誤解を明らかにすること」（3頁）、第二に「シャリーアと国家のこうした関係性を、近現代に固有の問題としてではなく、歴史的に考察すること」（3頁）を本書の目標に掲げ、シャリーアの理論と歴史を学ぶことを通して、現代の「イスラーム復興」や「イスラーム化」が「実際にはなにを意味するのかを正しく理解する（あるいは理解しようと努める）こと」（4頁）につなげる試みとして本書を位置づけ